

北登会歴史を楽しもう会平成 22年4月度例会
第7回歴史探訪ハイキング 4月6日(火)配布資料

「竹内街道と當麻寺周辺を巡る」

担当 : 3丁目井守徳弘

予定コース

近鉄学園前駅＝西大寺＝檀原神宮前＝線磐城駅＝竹内街道＝長尾神社＝ナベ塚古墳＝西光院＝綿弓塚＝地藏堂＝史跡の丘・竹内古墳群（昼食）I平田・春日神社＝昔麻寺＝大津皇子の歌碑＝大伯皇女の歌碑＝中将姫の墓・十三重石塔＝五輪塔＝首子塚古墳＝昔麻蕨速塚＝中将堂本舗＝近鉄大阪線当麻駅＝檀原神宮前＝西大寺＝近鉄学園前駅（解散 : 5時ごろ）

（徒歩距離約6km）（※石光寺は除きます。）

●竹内街道

竹内街道は『日本書紀』の推古天皇21年(613)の条に「難波より京(飛鳥)に至る大道(おおじ)を置く」と記されたわが国最古の国道にあたります。

西は大阪・堺市の大小路(おおしょうじ)から河内平野を東に向かい大阪と奈良の府県境にある二上山の南の竹内峠を越えて、当麻町の長尾神社に至る全長約30kmの街道です。

当時は遣隋使や遣唐使、渡来人らが往来し、まさに「大陸文化の通り道」となっていました。また近世に入ってから、お伊勢参り、長谷詣、昔麻詣など、「信仰の道」としてにぎわいました。今でもそれを偲ばせる数々の古い民家と道標が残っていて、情緒たっぷりの散策が楽しめます。芭蕉の門人、千里の出身地であり、作家司馬遼太郎さんが幼少期に住んだ所でもあります。

司馬遼太郎さんの『街道をゆく』1に「竹内街道」がある。「湖西のみち」につぐ第2番目の街道としてとりあげています。「竹内街道」の中に「竹内越」の話があり、その書き出しを述べて見ます。

「正面からみると、葛城の山が大和盆地(くんなか)にむかってなだらかに山すそをひき、竹内街道が赤土の坂になって、山へのぼっている。坂の登り口に長尾の在所があり、その中腹あたりに白壁の村があり、それが竹内である。(中略)葛城をあおぐ場所は、長尾村の北端であることがのぞましい。それも田のあぜから望まれよ。」とし、「大和で、この角度からみた景色が一番うつくしい」と述べています。

そして「私は幼年期や少年期には、竹内村の河村家という家で印象的にはずっと暮らしていたような気がする。そこが母親の実家だったからだが(中略)竹内峠の山麓はいわば故郷のようなものである。」と述べています。

江戸時代には芭蕉がここを歩き通ったところです。思いをはせて今日一日を歩いてみましょう。

●延書式内大社・長尾神社

祭神は、水光(みひか)姫命(右)・白雲別命(左)で、父神の白雲から、女神の水光姫命は水(雨)をもたらし、光(雷)にもなり古来から水の根源の神として崇敬されてきました。神武天皇が八咫鳥に導かれて吉野川の川下に着かれたときに吉野首(おびと)の祖先の井光(『日本書紀』)・草水鹿(『古事記』)に会っています。

『新撰姓氏録』(平安時代初期の年弘仁6年(815)に、嵯峨天皇の命により編纂された古代氏族名鑑)にも井光女として取り上げられています。

かつて飛鳥京と難波を結ぶ日本最古の官道であった竹内街道と、伊勢・長谷街道が吉野・壺阪から下田・王寺を経て堺へ至る長尾街道を行き交う人々を守護する神でした。

久安年間(1145-1150)の検注帳(『大乘院寺社雑事記』所載)には「平田庄内長尾宮三丁三反」と記されておりこまた、享保9年(1724)の長尾大明神明細帳では「境内5720坪、馬場600坪」とあり、昔は実に広大な境内地だったようです。

なお、昔、大和には大きな蛇が住んでいて、三輪山を三重に取り巻き、その尾は長尾まで届き、蛇の頭が三輪明神で、尾が長尾神社と伝えられ、また、長尾神社は東面し、大和高田市の竜王社(高田市駅北)は西面して、両社は相対し、竜王社が竜の頭で、長尾神社が竜の尾とも伝えています。

長尾の森の入口にある石橋(安永7年(778)を渡って二の鳥居をくぐり参道にはいると、左右に「寛文二(1662)と「寛文九(166)」の一番古い紀年銘の石灯籠がある。

創始はつまびらかではないが、『三代実録』(平安時代の歴史書で、901年に成立)に貞観元年(895)に長尾神社の記述があることから、当時すでにこの地に鎮座していた。

毎年10月4日長尾神社の例大祭の夜、初宵宮詣があり、氏子中が参拝します。中でもこの1年の間に誕生した子は、氏子になった印として拝殿左の絵馬殿に男子は武者、女兒は尉(じょう)と姥(うば)の絵を奉納するが、古い物は1778年の物もあります。

長尾神社の「絵馬殿」の大絵馬は、江戸時代の1779年(安永8年)9月4日に奉納され、女兒誕生を祝った絵馬でお目出度い絵の様です。

●ナベ塚古墳

ナベ塚古墳は墳丘がすっかり竹林になってしまっている。東側から見ると、なかなか整った古墳の状態に見えるのだが、西側からは道路や畑のために一部が削り取られた跡が明瞭で、かなり変形させられている。

周囲は水田となり、墳頂部は畑となって削平されている。

直径46mの円墳で、高さ4mである。1978年の調査によると、周濠があることが確かめられた。

朝顔形埴輪や鱗つき円筒埴輪などの破片が採取され、この地域では最も早い5世紀前半に築造された古墳とのことである。

●浄土宗・西光院

本尊は阿弥陀如来坐像(77cm)ですが、本堂には木造地蔵菩薩立像(重要文化財)や長谷式十一面観音(身粉観音)像高185cmがあります。また薬師堂にも地蔵菩薩を安置されています。

竹内峠の他の呼び方を身粉(みそぎ)峠と云い、これは西光院の長谷寺式十一面観音(身粉観音)に由来します。

1538年(天文7年)長谷寺の観音を彫るため楠の霊木を近江から川を下って河内経由で長谷寺へ運ぶ途中、竹内峠が狭く、霊木の梢を切り落して通し、その梢を粉(そ)いで造られたのが金箔仕上げ十一面観音菩薩です。



「十一面観音(身粉観音)」



阿弥陀如来坐像



地蔵菩薩像



地蔵菩薩像(重文)

●芭蕉旧跡綿弓(わたゆみ)塚・興善庵寺跡

貞享元年（1684年）8月芭蕉 41歳は、江戸を立って「甲子吟行（かしぎんこう）」で知られる旅に出て、9月故郷の伊賀上野を訪ね、母の墓参りをして、その足で奈良の「お水取り」を見て、京都、滋賀、美濃大垣、名古屋と巡り歩き、江戸へ戻ったのは翌年の貞享2年4月でしたが、この旅の紀行文が『野ざらし紀行』で、門人苗村千里の招きで、竹内の興善庵に 10日間滞在し、千里の案内で當麻寺にも参詣して諸仏を拝み、その合間に芭蕉が詠んだ句が次の句です。

此処は例の千里が旧里なれば、日頃とどまりて足を休む、藪より奥に家あり
綿弓や琵琶に慰（なぐさ）む竹の奥

この好句を記念して、1808年（文化5年）10月建てられたもので、正面に「綿弓塚」、左面に「文化第六己巳十月高田紅園愚公建之」と刻まれています。

大和高田の俳人・西嶋紅園（こうえん）と脇屋愚口（ぐこう）のことです。

傍らには、千里の句碑もある。

深川や芭蕉を富士に預け行く 千里

苗村千里に案内された松尾芭蕉は1688年（元禄元年）春再び竹内を訪れ、苗村家の下女・孝女伊麻にも会い、彼女の親を思う心に感激し「よろづのたつときも、伊麻を見るまでのことだ」と友人への手紙を書いています。芭蕉は数回この地を訪れ多くの句を残しています。なお、綿弓とは弓形の棒に牛や鯨の髭（ひげ）の弦を張ったもので、木綿の実を綿操車にかけ核をとっただけ綿を、弦ではじき打って柔らかくする道具のことです。

綿弓塚のある庭と民家を整備して休憩所とした屋内に、司馬遼太郎さんのや芭蕉の資料等が置かれています。綿弓の絵もあります。

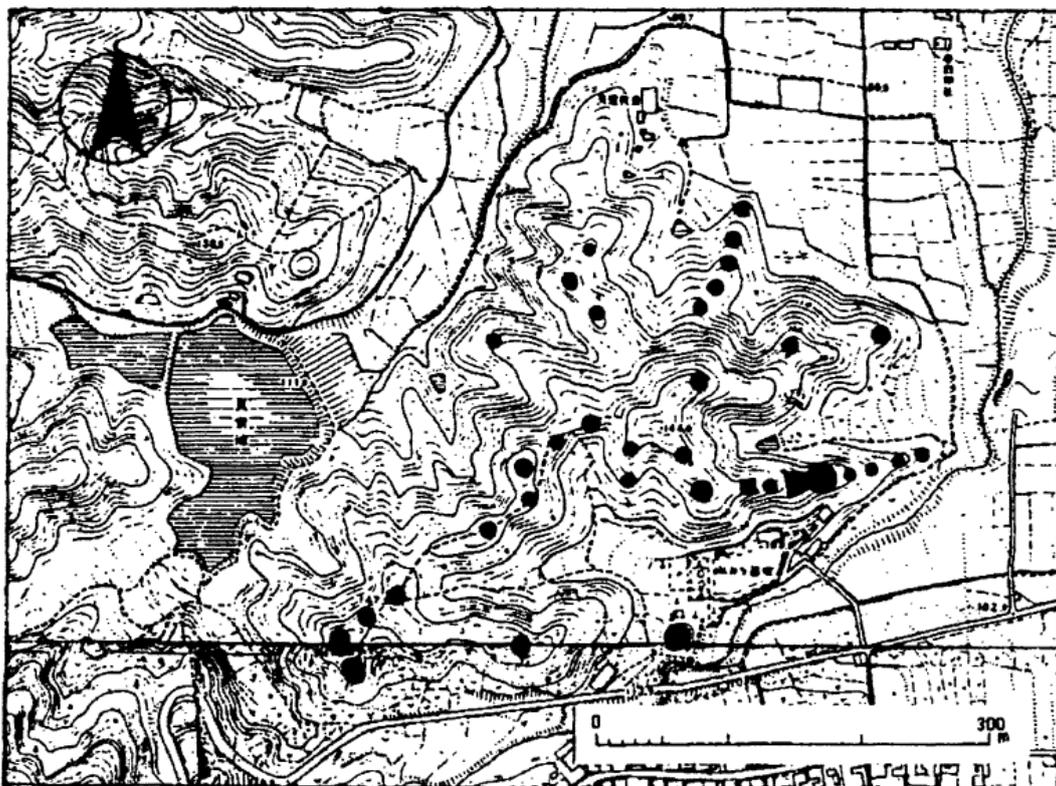
●竹内街道の角に建つ地蔵堂一

休憩所から東へ4軒目の竹内街道沿に平成13年新築されたお宅が司馬遼太郎さんの母親の里で、『街道をゆく』1の中にでてくる「竹内村の河村家」

そこから更に竹内街道を下った所に地蔵堂が建っていますが、その中に大峯山へ参上する人の為の常夜灯（石灯籠）が建ち、更にその横に背の低い道路標識（石柱）が建っています。正面には「右大峯山よしのはせ寺道」、右面に「明治三十五年一月大峯三十三度佐々木藤平建之」、左面に「左たいま王寺だるま寺」と彫られています。また、電信柱の後ろに置かれた三角形の石に「左たへま」と彫られ、「竹内街道」から「當麻寺」へ行くためのこ道標です。

●県史跡竹内古墳群・史跡の丘

「竹内峠」から国道 166 号を奈良県側-ちょっと下ると、左手に竹藪で覆われた「史跡の丘」があり、県史跡「竹内古墳群」です。ここはキトラ山を中心に前方後円墳 1 基を含む 34 基の古墳が確認され、その多くは 10m 程度の円墳です。5 世紀末から 6 世紀の中頃にかけて築造され、主墳と思われる第 22 号墳は全長 45m の前方後円墳で前方部に横穴式石室がありますが、後円部の石室は破壊されて残っていません。また、昭和 21 年に調査された第 34 号墳である茶山古墳は、凝灰岩の板石を組合わせた家形石棺が土中に直接埋葬され、石棺内に 3 体分の人骨と鉄刀、鉄製のやじり等があり、棺外から須恵器等も出土しました。



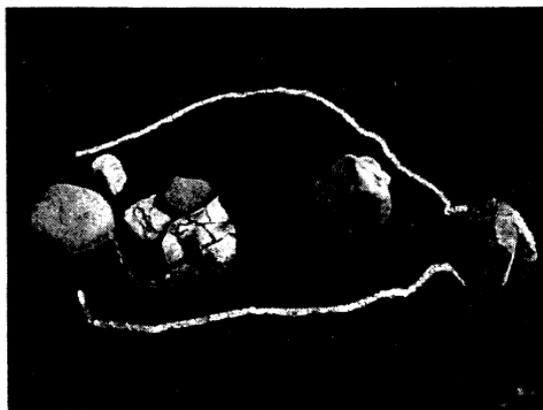
●二上山

「金剛生駒紀泉国定公園」の中であって、金剛・葛城山系の北端に位置し、奈良県と大阪府の県境にあり、今から 1500 万年前（地質時代の新生代 第三紀中新世）に火山活動で生成され、二つの峰からなるトロイデ式の山で、南側の低い方が雌岳（めだけ、標高 474m）、北側の高い方が雄岳（517m）です。雌岳と雄岳の二つの峰の間（馬の背）に沈む夕日が、古代から人々に深い感銘を与え、その美しい山容が大津皇子の葬られた悲しい歴史を秘め、姉の大伯皇女の想いと相俟って、二上山を見る人の胸に鮮烈な印象を与えて来ました。

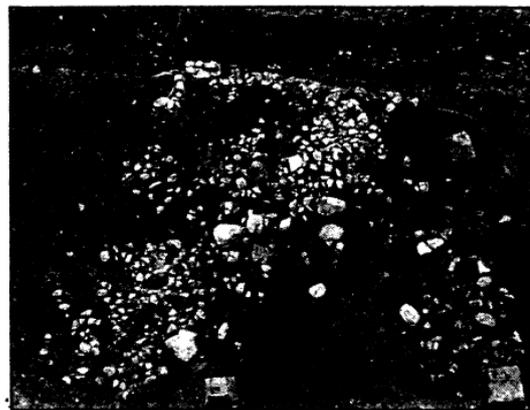
●縄文遺跡・竹内遺跡

大正7年(1918)に鳥居龍造博士らによって調査がおこなわれた。

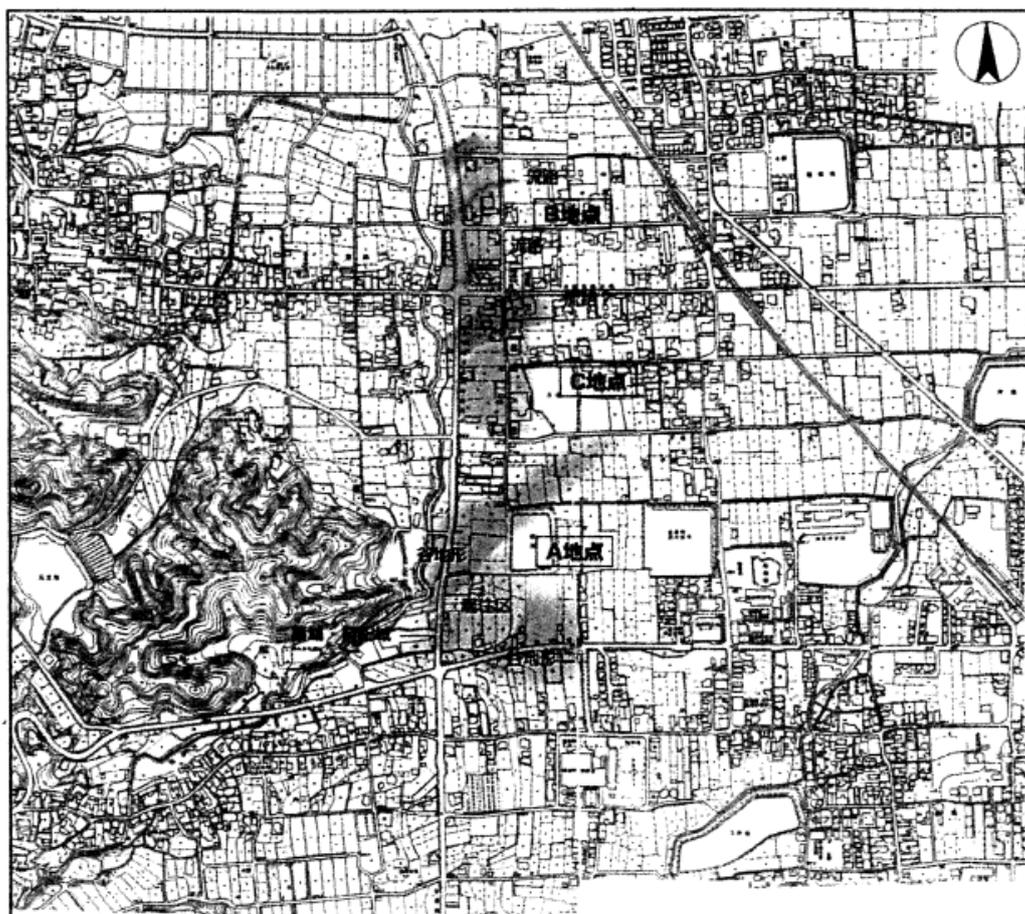
本格的な発掘調査が行なわれたのは昭和51年(1976)の橿原考古学研究所の調査により、縄文時代晩期の配石遺構と埋甕遺構が発見されました。



土坑墓、土器棺出土状況



配石遺構検出状況



竹内遺跡における縄文時代の遺構は、現在の竹内街道と県道五候・香芝線の交差点北方（A 地点）と、普麻寺参道をはさんだ北方（B 地点）と南方（C 地点）の山麓線沿いで確認されています。A 地点では、縄文時代晩期前半の土器、C 地点では縄文時代後・晩期の土器が出土しています。B 地点付近では、縄文時代後・晩期の土器のほか、縄文時代前期の土器が出土しています。各地点で、これらの土器にともなって、数々の石器が出土しています。また、遺跡のあちこちから二上山のサヌカイトが大量に出土しています。



土偶

スクレーパー

●龍吐水と注連縄（しめなわ）

玄関の軒下に旧式の手押し式の消防ポンプ「龍吐水」が吊り下げられています。

また、この辺りの旧家の軒下には、注連縄が張られていますが、これは悪病がみだりに家内に入らない様にするための呪（まじない）です。

●平田・春日神社

祭神は、天児屋根命、『古事記』によると天照大神が天岩戸へ隠れた時、八百万の神々と相談し、岩戸の前で祝詞を奏上した神さんです。

後に皇孫（天照大神の孫）の邇邇芸命が天降った時に、五伴緒として共に高千穂に降臨され、「和の神」「家内安全の神」として崇められ、また、後世の藤原氏の遠祖です。なお、拝殿は1813年（文化 9年）8月の再建ですが、本殿の左右に建つ 2 対の石灯籠には、延宝六歳（1678年）の銘があります。

二上山

金剛生駒紀泉国定公園の中にあつて、金剛・葛城山系の北端に位置し、奈良県と大阪府の県境にあり、今から 1500 万年前（地質時代の新生代 第三紀中新世）に火山活動で生成され、二つの峰からなるトロイデ式の山で、南側の低い方が雌岳（めだけ、標高 474.2m）、北側の高い方が雄岳です。雌岳と雄岳の二つの峰の間（馬の背）に沈む夕日が、古代から人々に深い感銘を与え、その美しい山容が大津皇子の葬られた悲しい歴史を秘め、姉の大伯皇女の想いと相まって、二上山を見る人の胸に鮮烈な印象を与えて来ました。

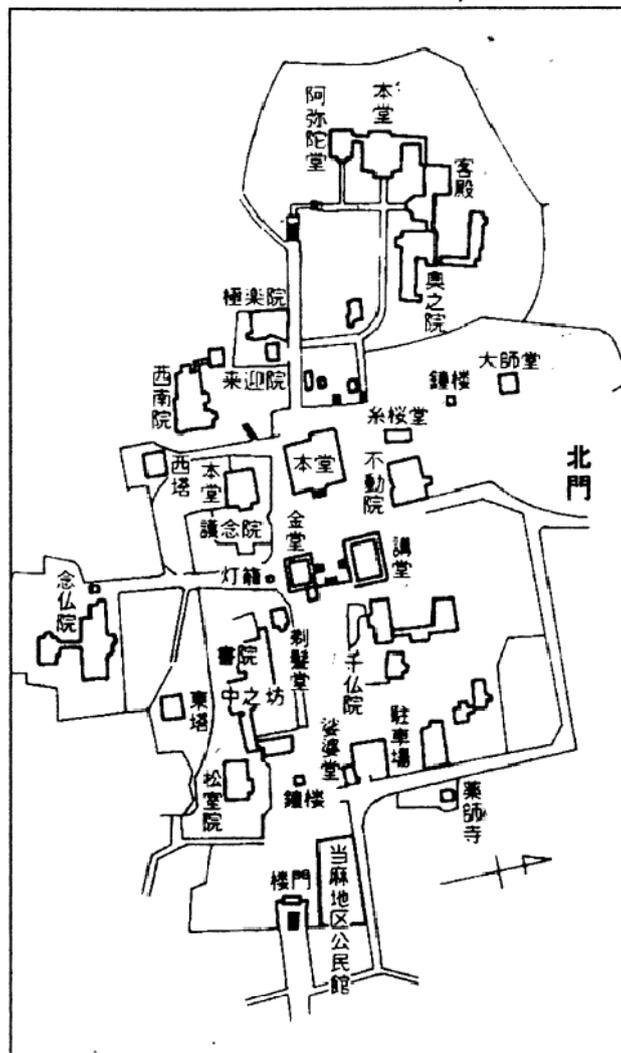
●當麻寺

當麻寺は、飛鳥時代創建の寺院。法号は禅林寺。山号は二上山。創建時の本尊は彌勒仏（金堂）であるが、現在信仰の中心となっているのは當麻蔓荼羅（本堂）である。宗派は高野山真言宗と浄土宗の並立となっている。開基（創立者）は聖徳太子の異母弟・麻呂古王とされるが、草創については不明な点が多い。

西方極楽浄土の様子を表わした當麻蔓荼羅の信仰と、蔓荼羅にまつわる中將姫伝説で知られる古寺である。

毎年 5月14日に行われる練供養会式（ねりくようえしき）には多くの見物人が集まります。この行事も當麻蔓荼羅と中將姫にかかわるものである。

奈良時代～平安時代初期建立の2基の三重塔（東塔・西塔）があり、近世以前建立の東西両塔が残る日本唯一の寺としても知られる。



●仁王門

阿吽（あうん）の両仁王像を安置した仁王門は、昔麻寺の東大門で、江戸時代 18世紀中頃に建てられ、入母屋造・本瓦葺の楼門です。

●日本最古の焚鐘（国宝）

當麻寺の仁王門（東大門）を入れて、直ぐ目の前に建つのが鐘楼です。中に吊り下げられている国宝の焚鐘は、白鳳時代に鑄造され、青銅で高さ 152.9cm、上帯に鋸齒文、下帯に忍冬唐草文を陽刻する。境内を更に進むと、左右に「塔頭寺院」が建ち並び、その間に金堂・講堂が東西一直線上に並び、金堂の南が中之坊・護念院・西南院で、その背後一段高い所に東西 2つの三重塔が建ち、古代に建てられ、東西両塔が現在も完備しているのは當麻寺だけです。また、金堂の他に蔓陀羅堂とも呼ばれる「本堂」や、境内の外には薬師堂等が独特の伽藍配置で建ち並んでいます。

●御来光の松遺跡

鐘楼の横を通って真っ直ぐ進むと、金堂の手前に柵で囲まれた中に枯れた巨松の切り株があり、傍らの石に「ごらいこうの松」と記してありますが、貞享元年（1684）俳聖の松尾芭蕉が『野ざらし紀行』で竹内出身の門人、苗村千里の故郷に 10日間滞在し、そのおりに當麻寺へ詣でて詠んだ句が、

僧朝顔幾（いく）死かへる 法の松 芭蕉

ですが、その時の青々とした松の姿はもう見られないけど、芭蕉が詠んだ法の松は、御来光の松との事で、数十年前までは勢い良く青々としていました。

●講堂（重文）

御来光の松の斜め右（北）の一段高い基壇上に講堂が建っています。

建立年代ははっきりしないけど、棟木の墨書から 1303年（乾元 2年）の再建で、桁行七間、一重寄棟造本瓦葺、なお、解体修理の際に地下から灰が検出し、前の講堂が焼失した事が判っています。堂内の内陣には低い床を張り、木造の須弥壇中央に藤原時代の作で、寄木造、丈六で重文の本尊・阿弥陀如来坐像が安置され、更に普通の僧形で重文・妙幢（みょうどう）菩薩と伝える木造仏立像も安置されています。また、講堂の直ぐ北側には北門が建っていて、南側には金堂が建ち、共に南面する金堂と、それぞれ南北一直線上に並んでいます。



木造・丈六阿弥陀如来坐像（重文）



木造・妙幢菩薩立像
（重文）

●金堂（重文）

二上山・當麻寺は真言宗と浄土宗2宗を併立し、推古天皇20年(612)用明天皇の皇子・麻呂子(まろこ)が兄聖徳太子の教えにより、河内国交野郡山田郷に草創した万法蔵院禅林寺に始まり、天武天皇白鳳10年(681)麻呂子の孫、當麻疹眞人国見が瑞夢により、役行者練行の当地へ移し、豪族當麻氏の氏寺として整備したといわれています。金堂は鎌倉初期の建立で、桁行五間、梁間四間、一重入母屋造本瓦葺、柱に文永5年(1268)田地寄進の銘があり、内部は土間で土の須弥壇を築き、本尊は塑像で高さ2.2mの国宝弥勒坐像、白鳳末の作とみられ、他に重文の「四天王立像」「吉祥天立像」を安置しています。

金堂内の三間二間が内陣で漆喰の須弥壇に安置されている本尊は、8世紀初めの作、塑像では最古の丈六(1丈6尺の事で、約4.85m)仏で、国宝・弥勒仏坐像です。また、四隅に立つ重文・四天王立像は、鎌倉時代の木彫多聞天像を除き、他は乾漆像です



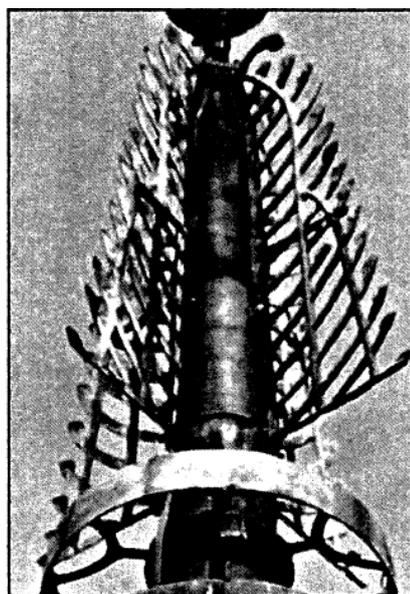
●日本最古の石燈籠

金堂の前方中央に建っている凝灰岩八角形の石燈籠は、重文で、我が国最古の石燈籠。白鳳時代(飛鳥時代と奈良の天平時代との間に挟まれ、大化元年(645)~710年平城遷都までの時代、美術史上の1つの時代)に松香石で造られ、数年前までは被いの屋根はありませんでしたが、雨から保護する為に屋根が造られました。

●東塔（三重塔）・国宝

「石燈籠」の脇を通過して、石段を上がり左へ曲がると、正面の一段高い所に国宝の東塔（三重塔）が建っています。建立年代ははっきりしませんが、斑鳩にある法起寺の三重塔に次いで古く、奈良時代まで逆のぼり、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけ大規模な改築が行われたけど、細部に天平時代の飛鳥様式をよく残し、荒削りな力強さを魅せ、後世の和様三重塔婆の基本形と云われています。明治 35年にも解体修理が行われ、現在に至っています。

塔は、本瓦葺、総高 23.24m、古式に則り基壇上に建ち、天を突く青銅製の相輪は普通九輪ですが 1つ少ない八輪で、水煙は珍しい魚骨式の意匠をもつ独特の物で、後世の物と云われています。なお、方三間四面の初層は中央間が初層は中央間が大変広く採られた板唐戸で、脇間は連子窓、円柱はエンタシスですが、二・三層は共に柱間が方二間で、古塔の二層が二間は他で見ることがありません。また、天井は組入天井で、初層内部に心柱と四天柱があり、心柱の頂点に昔仏舍利が安置されていました。



水煙（東塔）

●西塔（三重塔）・国宝

東塔から約 50mほど離れて、やはり基壇上に国宝の西塔（三重塔）が見えています。東塔よりは少し高く、総高 24.81m、よく見たら建築様式は随所に違いがあります。建立の年代は、こちらも不明ですが、東塔よりも少し下り、平安時代の末期治承 4年(1180)平童衡の南都攻略によって焼失した後、鎌倉時代に源頼朝によって再建されたので、東塔よりも新しい様式が見られ、こちらは和様式で、穏やかで雅さを感じさせて、後世の和様三重塔婆の基本形とも云われている名塔で、大正 2年に解体修理が行われ、今に至っています。相輪はこちらも八輪ですが、水煙は唐草模様で構成された方形の先端に宝珠状の火焰を配した形の見事な物です。

また、二・三層は東塔と異り、柱間が方三間になっていて、天井が組入で、初層の内部に心柱が通り、その周りに仏画を描いた板囲いが施されて、四天柱があります。

水煙(西塔)



●本堂(蔓陀藤堂)・国宝

當麻寺信仰の中心をなすお堂で、建立は、外陣の棟木に永暦二年(1161)の銘があるので平安末期ですが、内陣の各部分に天平時代の遺構を残して、桁行七間、梁間六間、一重寄棟造本瓦葺、本尊は内陣正面の国宝の当麻蔓陀羅厨子にかかっている重文の著色掛幅(文亀蔓陀羅図)で、16世紀初頭に伝法橋慶舜が原本を模写し、原本は「中将姫」が百駄の蓮茎を集めて蓮糸を繰り、井戸に浸して五色に染め、その蓮糸を使い、一夜にして織り上げられた一丈五尺(約4m四方)の綴織當麻蔓陀羅です。

根本蔓陀羅と呼ばれる天平時代の原本(国宝)は早くから損傷が激しかったようで、古くから多くの写本が作られました。第一回として建保年間(鎌倉時代)に転写されたと記録されるものは残念ながら遺っておらず、第二回転写の文亀本(室町時代)が現在本堂に配られています。



浄土蔓陀羅絹本著色掛幅(一部)
文亀蔓陀羅図 重文

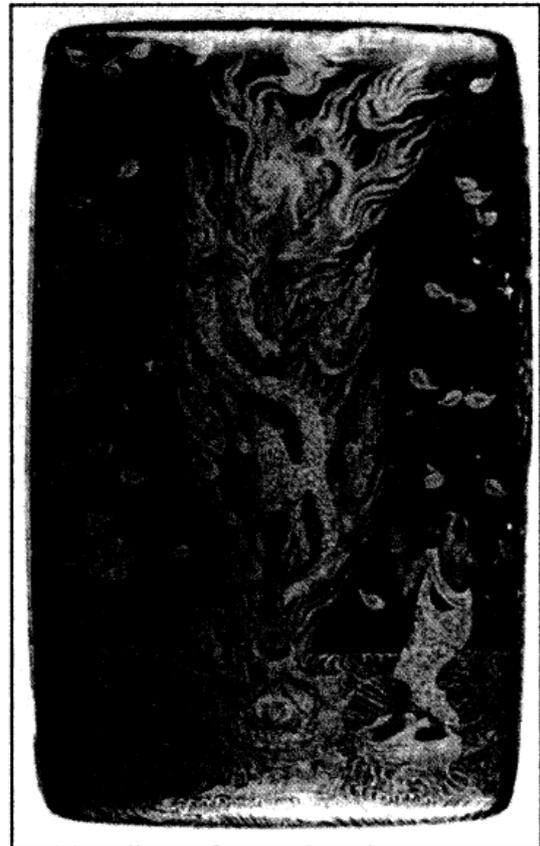
●当麻寺・奥院

本堂（蔓陀羅堂）の背後（西側）の高所に當麻寺の塔頭の 1つ、法然上人二十五霊場第九番、當麻寺・奥院があります。当院の直ぐ南西に麻呂子山（標高 215 m）が聳え、県文化財の本堂（御影堂）の背後には二上山も見えます。当院は、1370年（応安 3年）知恩院第十二世誓阿上人が開創された「往生院」に始まり、ご本尊は、誓阿上人が知恩院から移安された「宗祖円光大師（法然）坐像」ですが、法然上人自ら 48度開眼された尊像で、誓阿上人の夢告の血垂れの御影です。なお、寄棟造本瓦葺の本堂は延享 2年（1745）上棟で、「方丈」は、慶長 17年（1612）の上棟です。

奥院の本堂の裏側は、二上山を借景にした庭園で、石組みの中に池を配し、十三重塔等が置かれています。なお、本堂（御影堂）の斜め前の境内から普麻寺の東西両塔（三重塔）が同時に眺められます。

●宝物殿

宝物殿には平安時代の蒔絵工芸品の傑作、国宝の俱利迦羅龍蒔絵経箱（くりから不動尊経箱）等が収蔵されていますが、奥院・庭園内にも同様の俱利迦羅不動尊画を彫った石が置かれ、黒龍が剣にまといついて、正に剣を呑まんとする様を表し、利剣と羅索（けんじゃく）を合したる相は、不動明王の変相です。また、南側の「楼門」は二階に鐘を吊す「鐘門」ですが、下層は唐様で、上層は純和様です。



国宝・俱利迦羅龍蒔絵経箱

●大津皇子の歌碑

當麻寺の北門から出ると近畿自然歩道で、少し行って二又で北へ辿ると石光寺へ向かいますが、道を北西へ上がると直ぐ公園で、大津皇子（天武天皇の第3皇子）が石川郎女に贈った万葉歌碑（巻2-107）が建っています。

あしひきの山の滴に妹待つと 吾立ち濡れぬ山のしづくに

山の中に身を隠して恋人を待っているうちに、すっかり夜露に濡れてしまった青年が、やっと現れた乙女に送った歌らしい。逢い引き相手の乙女の名は石川郎女（いしかわのいつらめ）である。彼女も又、すかさず歌を返した。

巻2-108で

君が濡れけむあしひきの 山のじづくにならましものを
私を待って、あなたがお濡れになったという山の雫、その雫に私になれたら良いのにと応えています、残念ながらその歌碑は在りません。

●大伯皇女（おほくノひめみこ）の歌碑

大津皇子の万葉歌碑から道を北へ辿ると、姉の大伯皇女の万葉歌碑巻 巻2-165が道の角に建っており、

うつそみの人なる我や明日よりは 二上山を弟世（いろせ）と我が見む
現世（うつしよ）の人であるわたしは明日からは二上山を弟として見るのでしょうか。

大津皇子の同母姉、大伯皇女は 14歳から 26歳まで天照大御神に奉仕する齋宮として伊勢にありました。大伯皇女が任解けて飛鳥へ帰ったのは天武天皇 15年（686）11月16日、既に弟大津皇子は母の妹持統天皇によって、1月半前の 10月3日に処刑されていました。上記の悲歌は、遺骸を二上山に移し葬る時に詠まれました。

●中将姫の墓塔・十三重石塔

當麻北共同墓地の中に「中将姫の墓塔」が建っています。花崗岩で造られた十三重塔で、高さが約 3m、初重の四方仏は、軸部に縁をとった中に舟形を造って、そこに厚肉に彫出し、屋根は軒反りが強く、鎌倉時代末期の様式です。また中将姫のお墓は、ならまちの徳融寺（鳴川町）の境内にもありますが、こちらの方が立派です。

なお、中将姫は天平宝字7年（763）6月23日 29歳や時、蓮糸で當麻蔓陀羅を織り上げると、二十五菩薩の来迎を受け、極楽浄土に往生し、ここに眠っておられます。



ならまちの徳融寺の石塔

●奈良県最古の五輪塔・重文

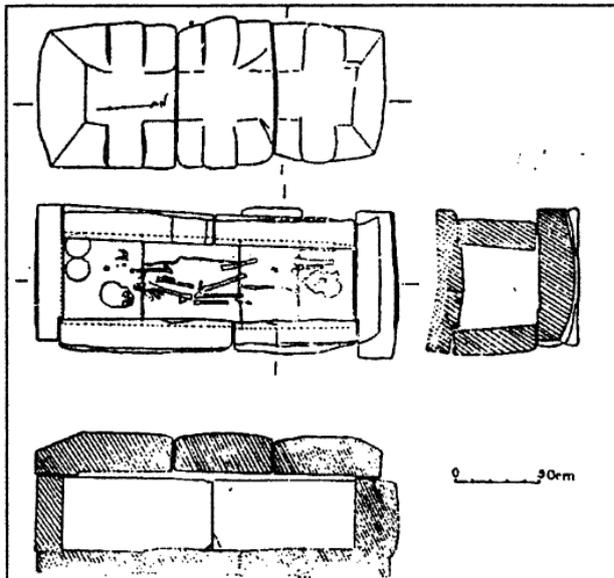
當麻北共同墓地内東側の小高い所に重量感ある「五輪塔」が建っています。高さ 2.5m、二上山の凝灰岩で造られ、塔身（水輪）が壺形で、頂部の宝珠（空輪）と請花（うけばな、風輪）も特異な形をしています。また、四方の側面には力強い葉研彫の梵字が刻まれています。銘文、年代記はありません。けれど様式から平安時代の末期と推定され、奈良県下最古の五輪塔です。伝承では、源義朝に仕えた鎌田兵衛藤原正清の子鎌田小次郎政光の墓、もしくは、1159年平治の乱で亡くなった鎌田一族の供養塔とも云われていますが、今でも、その末裔で、奈良県香芝市鎌田の鎌田家によって、大切に守られ、供養されています。

昔麻北共同墓地から出ると右側に地藏堂が建っています。中将姫が祀られています。

●奈良県史跡・首子塚

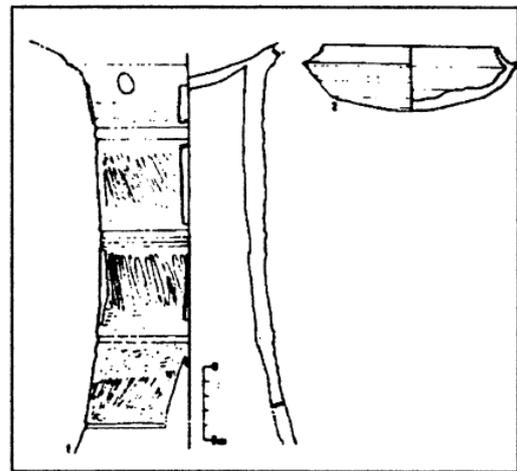
二上山東麓の丘陵上に、東西約 400m、南北約 300mの範囲に点在する古墳は、古くから首子七塚と呼ばれている。

昭和 51年、52年の調査では、10基の古墳が存在していたことが判明しています。1号墳は櫛山古墳、2号墳の墳丘は削平されていましたが、丘尾を切断する形で溝が半円形にめぐり、溝内から多数の円筒埴輪・家形埴輪・須恵器が出土しました。3号、4号墳は方墳で、3号墳では木棺を直葬し、4号墳では横穴式石室が主体としていました。群中最大の 5号墳は帆立貝式前方後円墳で円筒埴輪列をもち、未調査の 7号墳は一辺 18mの方墳、8号墳は径約 25mの円墳で横穴式石室を主体としていますが、石室内には凝灰岩製の石棺底石が残っていました。この石室は中世に再利用されていることが判明しています。

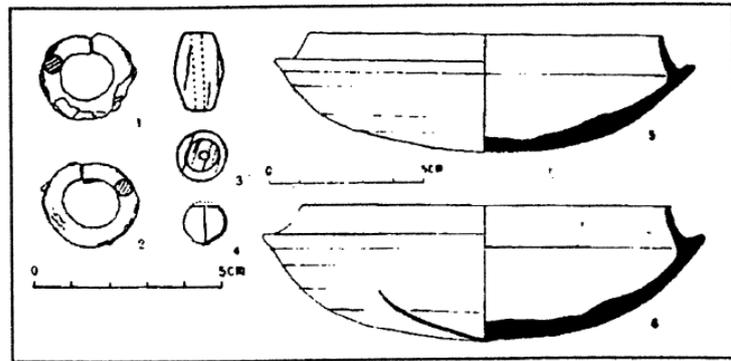


1号墳・横山古墳の組合式家形石棺

首子七塚出土の須恵器



1号墳・櫛山古墳出土物
 (1. 2. 金環 3. 棗玉
 4. 空玉 5. 6. 須恵器杯(身))



古墳名	造営時期	墳形	主体部	出土遺物	外部施設
首子1号墳 (櫛山古墳)	6世紀中～ 後	円墳 (径18m)	組合式家形石棺横 穴式石室	須恵器杯(2)・高杯・長 頸壺・棗玉・空玉・金環 (2)	
首子2号墳	6世紀中	方墳 (一辺15m)	木棺直葬?	須恵器台	円筒埴輪 家形埴輪
首子3号墳	6世紀中	方墳? (一辺10m)	木棺直葬	鉄釘、刀、鉄鏝	
首子4号墳	7世紀前	方墳 (一辺26m)	横穴式石室 凝灰石石棺材料	須恵器、台付長頸壺、高 杯、土師器、長頸壺	
首子5号墳	6世紀	円墳?帆立貝 (全長25m)	木棺直葬?	須恵器	円筒埴輪
首子6号墳	不明	円墳 (径23m)	建物基壇		
首子7号墳	飛鳥時代	一辺17m			
首子8号墳	6世紀後	円墳 (径12m)	横穴式石室 組合式石棺	須恵器、土師器、金環、 鉄鏝、鏝具、飾鉾、 須恵器杯、平瓶、その他	
首子9号墳	6世紀後				
首子10号墳	6世紀中	円墳 (径13m)			
首子11号墳				円筒埴輪等	

●浄土宗・慈寒山普照律院・石光寺

浄土宗慈雲山普照律院石光寺(せっこうじ)は天智天皇の時、光輝く所があり、掘ると、光を放つ石仏の弥勒三尊が出たので、勅願により役行者が堂宇を建て「石光寺」と称したのが始まりと伝えられ、後に、中将姫が境内にある染の井で蓮糸蔓陀羅の糸を染めたので別称・染寺とも呼ばれ、平成3年弥勒堂を建て替えの際、堂の下から白鳳時代の弥勒石仏が出土し、弥勒堂の横に建つ堂内に置され、現存する石仏では日本最古です。

境内で4月下旬に3000株の牡丹、5月初旬に500株の石楠花が咲きます。

石光寺の狭い境内には、中将姫が蓮糸を染めた染め井の傍らに糸掛け桜もありますが、この桜の木は、かつて役行者が仏教の興隆を願って植えた木です。また、境内に折口信夫の歌碑、与謝野鉄幹、昌子の文学碑などもあり、それらの碑を取り巻く様に牡丹が植えられて、春の牡丹はもちろん、11月下旬～2月上旬の「寒牡丹」が見事です。

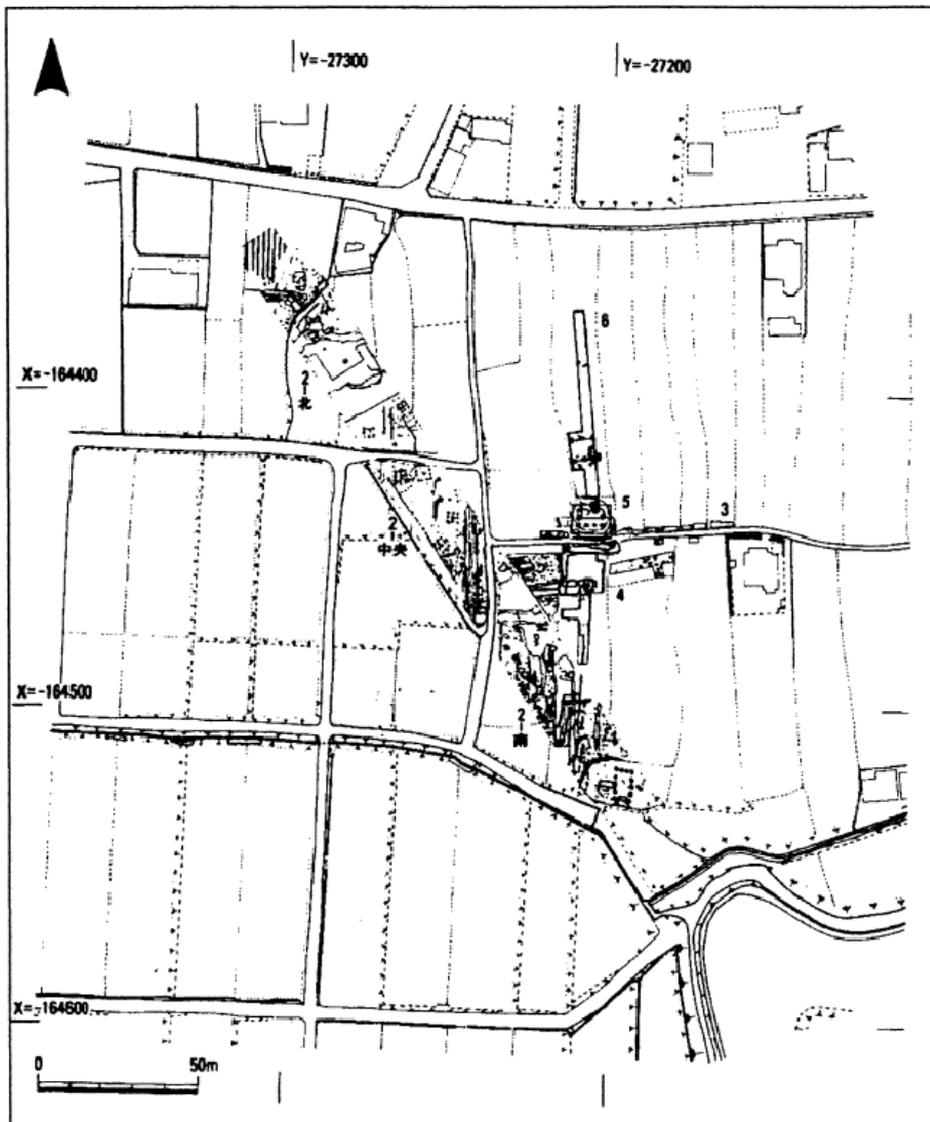
なお石光寺さんは花が咲いて無い時に拝観料を取られません。

●塚穴古墳

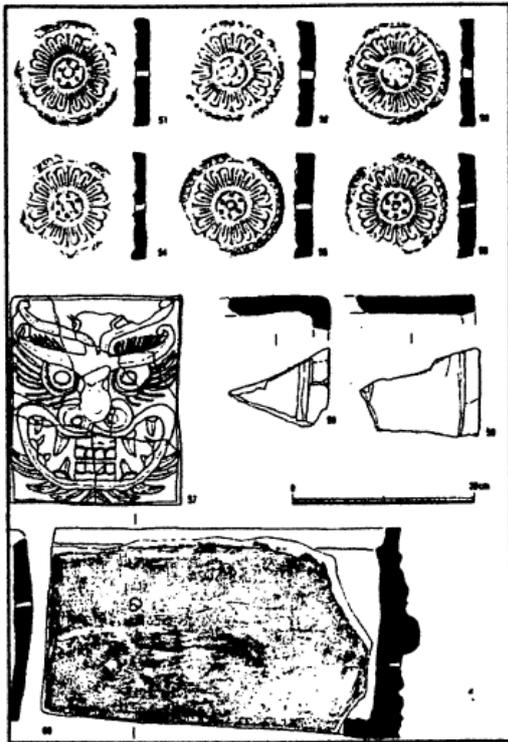
『葛城市観光マップ』には掲載されていますが報告書なし。

●只塚廃寺・首子遺跡

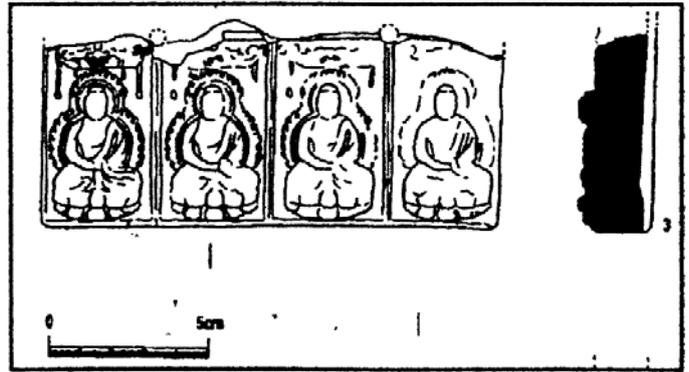
只塚廃寺は古くは古墳として考えられ、その後、樫原考古学研究所調査によって寺院遺跡であることが次第に指摘されてきました。性格が不明なまま時間が経過し、只塚本体の調査を実施するに及び礎石が検出され建物基壇であることが判明しました。調査においては7世紀後半の石仏や、埴仏、川原式の軒瓦、鬼面文隅木蓋瓦など多様な遺物が出土し当時の華麗な寺院の様子が明らかになりました。伽藍としては仏堂が一つしか確認されておらず、全貌が明らかになったわけではありません。



発掘トレンチ地図



垂木先瓦・隅木蓋瓦



埴仏

當麻蹶速 (たいまのけはや)之塚

相撲館「けはや座」の直ぐ隣に建つのが「當麻蹶速塚」、「日本書紀」によると、我が国における相撲の始まりは、第11代垂仁天皇 7年、自分の強力を鼻に掛け自慢していた當麻蹶速を負かすため、出雲国より呼び寄せられた野見宿禰 (のみノすくね、土師氏の祖で、菅原道真の祖先) とが、奈良県桜井市穴師に建つ穴師坐兵主 (あなしにいますひょうず) 神社の参道脇にある広場 (カタヤケシ、現在、土俵と小さな石の両の相撲神社が在る) で、7月7日に天覧相撲をしたのが初めて、勝負は野見宿禰が當麻蹶速を蹴り倒して、あばらの骨をへし折って勝ちました。そして、負けた當麻蹶速が、現在も「五輪塔」の下に眠っています。

●中将堂本舗

ちょっと休憩。お茶でもいかが。(300円)

●参考文献

- 『葛城市の考古学 I』葛城市歴史博物館企画図録 平成17年 葛城市歴史博物館
- 『奈良県の主要古墳 II』前園実知雄 昭和49年 奈良県教育委員会
- 『当麻寺パンフ』曹麻寺奥院
- 『當麻町史』当麻町史編集委員会 昭和51年 当麻町教育委員会
- 『當麻村史』池田未則編 昭和31年 当麻村教育委員会
- 『當麻町史 続編』当麻町史編集委員会 昭和51年 当麻町教育委員会
- 『太子町・当麻の道』金本朝一 昭和55年 綜文館
- 『香芝町史』香芝町史調査委員会 昭和51年 香芝町役場
- 『只塚廃寺・首子遺跡』奈良県教育委員会 平成15年 奈良県立橿原考古学研究所
- 『街道をゆく 1 甲州街道、長州路ほか』司馬遼太郎 1997年 朝日新聞社
- 『葛城市観光マップ』葛城市観光協会